「秩父教育第１４０号」の発刊に寄せて

秩父市教育委員会教育長　前 堅 進 一

今年度で１４０号を数えるこの「秩父教育」は、昭和３１年に創刊され、教育に関する各幼稚園、各小・中学校としての取組や教職員個人としての取組のほか、教育情報なども掲載してきました。その後、教育研究所の調査・研究結果の報告や各幼稚園、各小・中学校の学校研究を紹介する「秩父市・教育研究」と統合する形で、現在の「秩父教育」として発刊しています。

秩父市教育委員会では、本年度も「未来の秩父を担う人材の育成と特色ある元気な学校づくりの推進」を目指し、「①確かな学力と創造力、②豊かな人間力健やかな体、③秩父ならではの特色ある教育活動」を大きな柱とした『秩父市学校創造スーパープラン』に基づいた教育を推進して参りました。また、本年度は、新学習指導要領が中学校で全面実施され、各学校では新学習指導要領の具現化に向けた様々な取組や研修が進められています。

「一年の計は穀を樹うるに如くは莫し、十年の計は木を樹うるに如くは莫し、終身の計は人を樹うるに如くは莫し」（管子）という格言があります。「一年先の計画を立てるとしたら年内に収穫のある穀物を植えるのがよい。十年の計画を立てるというなら木を植えるのがよい。一生の計画を立てるつもりなら人材を育成することだ。」というものであります。人づくり、つまり教育は、社会の根幹をなすものといえます。各学校等において、教師が、学校教育の一番の使命である学力の向上に向けて児童生徒としっかりと向き合い、このための時間や環境を整え、指導力の向上を図る取組を、さらに積極的に展開していただくことを期待しています。

結びに、貴重な原稿をお寄せいただきました多くの方々に感謝申し上げるとともに、秩父市の教育の益々の発展を祈念申し上げ、発刊にあたってのあいさつといたします。

目　　次

巻頭言　　秩父市教育委員会教育長　前 堅 進 一

Ⅰ　幼稚園における園内研修の取組

1　自立に向けて３つのめばえの効果的な実践方法の工夫　久那幼稚園　4
　～「生活」：健康で安全な生活をする具体的取り組み～

Ⅱ　小学校における校内研修の取組

1　できる喜び・わかる喜びを味わう児童の育成　秩父第一小学校　6
　～説明する力を身に付ける指導の充実～
2　子どもたちがせいいっぱい運動に取り組む体育の授業づくり　花の木小学校　8
3　言語活動を充実させ、児童の思考力・表現力を伸ばす指導方法の工夫　西小学校　10
4　豊かな心を育み、確かな力を付ける　南小学校　12
　～思いやりの心と伝え合う力を求めて～
5　学力向上を図り、一人一人に説明力する力を身につけさせる指導法の工夫　尾田蒔小学校　14
　～算数科を中心に～
6　自分の考えをもち、伝え高め合う学習活動　原谷小学校　16
7　確かな学力（基礎・基本）を身につけ、知力にあふれ生き生きと活動に取り組む児童の育成を目指して～読解力・表現力の向上をめざす実践を通して～　久那小学校　18
8　学ぶ楽しさを味わわせ、確かな学力を身につけさせる学習指導　高篠小学校　20
　～言語活動を充実させる取組を通して～
9　基礎・基本の確実な定着と学力向上を目指した学習指導の研究　大田小学校　22
　～算数科～
10　気づき、考え、伝える子の育成　影森小学校　24
　～言語活動の充実をめざして ～
11　「接続期プログラム」の実践及び検証に係る研究　吉田小学校　26
12　主体的に学び、確かな学力を身につける児童の育成　大滝小学校　28
　～算数科における個に応じた指導の充実と工夫・改善を目指して～
13　学力向上と豊かな心の育成　荒川東小学校　30
　～ 言語活動の充実をとおして ～
14　学力の向上と豊かな心の育成　荒川西小学校　32
　～言語活動の充実をめざして・複式学級の指導法の工夫改善～

Ⅲ　中学校における校内研修の取組

１	自ら学び、高めあう生徒の育成 ～ 学び合い、伝え合う学習指導の工夫 ～	秩父第一中学校	３４
２	確かな学力と豊かな心の育成を目指した指導の工夫 ～確かな学力を育む授業の創造・教育に関する ３つの達成目標の具現化・豊かな心の育成～	秩父第二中学校	３６
３	豊かな人間関係を築き、共によりよく生きる生徒の育成 ～道徳的実践力と人権感覚の育成を基にして～	尾田蒔中学校	３８
４	確かな学力の育成 ～意欲を高めるための学習指導の工夫～	高 篠 中 学 校	４０
５	個に応じたわかりやすい授業の創造 ～特別支援教育の視点に立った授業改善と学習環境の整備を通して～	大 田 中 学 校	４２
６	生きがい・居がい、頼りがい、やりがいのある 生き生きとした学校づくり	影 森 中 学 校	４４
７	基礎学力・学習意欲の向上を目指し、互いに高め合う生徒の育成	吉 田 中 学 校	４６
８	思考力を高め表現できる生徒の育成 ～個に応じたきめ細やかな指導の充実を通して～	大 滝 中 学 校	４８
９	学力向上と豊かな心の育成 ～種をまき、水をやり、しっかり見届ける教育～	荒 川 中 学 校	５０

Ⅳ　初任者としての一年を振り返って

花の木小学校	増　　雅代	５２
西小学校	遠山　宗則	５３
原谷小学校	髙田　佳美	５４
高篠小学校	大島　悠史	５５
吉田小学校	黒沢　恵理	５６
秩父第一中学校	新井　由里	５７
秩父第一中学校	田端　　香	５８
尾田蒔中学校	横田　　淳	５９
尾田蒔中学校	笠原　麻衣	６０
高篠中学校	福島　　孟	６１
影森中学校	金子真莉絵	６２
荒川中学校	髙橋　雄大	６３

平成２４年度　秩父市学校創造スーパープラン

編集後記

Ⅰ　幼稚園における園内研修の取組

自立に向けて３つのめばえの効果的な実践方法の工夫
―――「生活」: 健康で安全な生活をする具体的取り組み ―――

秩父市立久那幼稚園

１　はじめに

子育ての目安「３つのめばえ」は、小学校入学までに「これだけは身につけたい」という子育ての目安を示すものである。「３つのめばえ」は、幼稚園教育要領及び保育所保育指針に示されたねらいと内容を踏まえながら、幼児期の特性である「生活」「他者との関係」「興味・関心」の広がりに注目し、この視点から小学校入学までに身につけてほしいことを取りまとめたものである。本園では、この３つのめばえについて研修を進めている。ここでは、本園の研修の取り組みの中で焦点を当てた『「生活」－健康で安全な生活をする』　の中で幼児が進んで食べようとする気持ちを持つための環境の構成と教師のかかわりについてまとめた。

２　取組の概要

（１）ねらい

幼稚園で身に付けさせることとして、県のリーフレットでは、次の内容が示されている。

〇先生や友達と食べることを楽しむ

・食事に関するきまりやマナーを守りながら、楽しく食べる

・食べることの大切さがわかり、食べ物に関心をもつ

・生活の流れや準備・片づけの手順などを意識して、一定の時間内に食べ終えようとする

これを受け、本研究では次の事項をねらいとした。

◎教師や友達と一緒に給食を食べることで「楽しい」「食べてみよう」「食べられて嬉しい」という感情が芽生え、進んで食べようとする気持ちが持てるようにする。

◎健康な心と体が育っていくために、一人一人の幼児の実態や思いに沿った教師の役割や環境構成を見出し、自分にもできるという達成感や満足感を積み重ねることで次へのステップへとつなげるようにする。

（２）具体的な取り組み内容

ア　Ａ子の実態

・食が細く、入園当初は食べる物を見た目で判断し、野菜類を一切受け入れずかなりの偏食であった。一つまみ食べるのに５分以上かかる事も多く、白飯も１粒ずつ食べるなど、スプーン１杯程の量でも時間を掛けてほとんど食べきれない状態だった。泣いて拒否したり目を盗んで床に落としたりすることもあった。

イ　実践【みんなと一緒だから食べられるよ】Ａ子とＢ子を通して（３歳児年少組～）

教師が介助してもなかなか進まないので、ある日早く食べ終えたＢ子に「Ｂちゃん、Ａ子ちゃんを応援してあげてくれる？」と声を掛けてみた。するとＢ子は「頑張れ」と側で声をかけ、それを見て他の幼児も「Ａ子ちゃん頑張れ～」

と声を掛けてくれた。しかしＡ子に変化が見られなかったので、「Ｂちゃんが口に入れてあげたら食べるかな？」と提案してみると、Ｂ子が差し出したスプーンのおかずをＡ子が口にした。Ｂ子は「私があげたら食べたよ」と嬉しそうにずっと側についてくれていた。Ａ子とＢ子の頑張りを教師や友達が「すごい！」と褒めると両者とも満足そうな顔をしていた。もっと褒められたいという気持ちがＡ子にも出てきたようで、次の日からは「野菜食べた」「あとちょっと」「全部食べちゃったよ」と自分から伝えてくるようになった。それを受け、Ａ子が早く食べ終えた時に「Ａちゃん、Ｃ君の応援してあげて」と声をかけると、任されたことが嬉しくて進んでＣ男の所へ行って食べさせてあげ「Ｃ君食べちゃったよ～」と笑顔で担任に伝えてきた。

４歳児になり、教師が順番でグループに行き給食を食べるようにすると「今日何グループ？」と気にかけ、自分のグループに来るのを心待ちにしてくれた。少量ではあるが残さずにみんなと一緒にごちそうさまをすることが増えたので、毎日褒めると「今日も食べちゃうよ」と自分から宣言して食べるようになった。

グループで楽しい給食♪

ウ　実践を通しての考察

・個々にあわせて量を加減することで幼児の負担が減り食べきれる喜びを味わえる。それにより徐々に自信がついていき、次への意欲にもつなげていくことができた。
・量は少量であるが、教師や友達に励まされたり褒められたりすることで食べられた喜びを味わい、「もっと食べてみよう」という気持ちが育っていった。
・教師だけではなく、子ども達同士のかかわりを持たせたことで、お互いに「食べよう」「お手伝いしてあげたい」という相乗効果が得られ、自分なりに頑張る気持ちや相手を思いる気持ちも育っている。
・「食べられた」「私のことも見て」という気持ちの表れを見逃さずに受け止め、幼児の心に寄り添いながら、状況に合った対応をすることが大事である。
・食べきれず泣いた日もあったが、無理強いをせずに教師が膝に抱いて「大丈夫」だと受け止めてあげることで安心し、挫折しないで今も継続できている。

３　成果と今後の課題

収穫したジャガイモでパーティー！

・教師や友達がいるという安心感や嬉しさが得られるような落ち着いた環境を整えることで「みんなと一緒で嬉しい」「楽しい」「褒めてもらえる」という喜びを味わうことができる。
・幼児が何に関心を持っているか、どのようにしたいのかなど取り組み方や心の動きを観察し、子どもの心身の発達を見据えた上で、主体的に活動できるよう見通しを持って保育を展開していくことが必要である。
・職員全員で連絡や相談し合うことで協力体制を作り、自分のクラスに限らずそれぞれの場面や子どもに応じた援助を行っていけるようにする。
・結果を求めるのではなくそれまでの過程が重要であることを念頭に置き、幼児のありのままの姿を受け止めながら、見通しを持った保育を行い、評価と反省を行いながら日々の保育に当たっていきたい。

（　担当　主任教諭　町田　美穂　）

Ⅱ　小学校における校内研修の取組

「できる喜び・わかる喜びを味わう児童の育成」
――― 説明する力を身に付ける指導の充実 ―――

秩父市立秩父第一小学校

1　はじめに

本校は、昨年度より言語活動の研究を通して、本主題に迫ってきた。昨年度は主に言語活動の基礎・基本や各教科における言語活動を活かした取組について研究してきた。その成果は、言語活動の共通理解が図れ、各教科指導の中で言語活動の取組に見通しがもてるようになってきたことである。また、次年度の課題として、更に言語活動を活性化させるために、児童に身に付けさせたい具体的な表現力を明確にする必要性を共通理解した。

今年度は、昨年度の研究から生じた課題に取り組むために、「説明する力を身に付ける指導の充実」という、副主題を掲げ、児童一人一人の言語活動を一層活性化することによって、本主題に迫ろうと考えた。

2　本校が考える「説明する力」とは（説明する力の定義）

自分の考えを自分の言葉で、みんなに分かりやすく伝える力

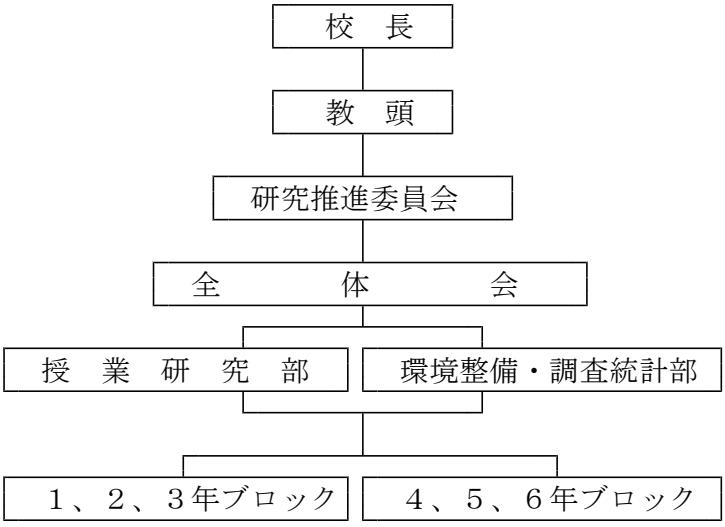
3　研究の仮説

・発表力を高める指導を工夫したり、読書指導を充実させて読解力の向上や語彙数を増やしたりすれば児童に説明する力が付く、と考える。

4　研究内容

（１）「説明する力」を高めるための手立てを考える
（２）「説明する力」を育てる授業改善
（３）言語活動を充実させるための環境整備

5　研究組織と主な取組



（１）研究推進委員会
・教務部・国語主任・算数主任
・体育主任・生徒指導主任
・研究の骨格や研究の進め方を決める。

（２）授業研究部
・発表の仕方のパターン
・学習指導案の形式

（３）環境整備、調査統計部
・校内掲示計画　掲示物の作成
・言語環境の整備
・各種調査の作成、集計、考察

（４）ブロック研究部
・研究授業　・教材教具の作成

６　説明する力を身に付けさせるための具体的な取組

（１）発表の工夫と約束

ア　数直線、ブロック、カードなどの具体物を使い、説明を目に見えるものにする。

イ　発表の仕方のパターン。（算数科の発表の例）

①「　～についての発表をします。」②「まず・・」③「次に・・」④「最後に・・」⑤「そうすると・・」⑥「私の説明は、わかりましたか」

（２）学習指導案の形式

ア　発達段階や各教科の特性に応じた「説明する力」を身に付けさせるための具体的な手立てを学習指導案に記述する。

イ　説明する力を身に付けさせる場面を必ず設定し、学習指導案に明示する。

（３）発表の仕方を定着させるための掲示物の作成

ア　教室掲示用の「発表の約束」（低、中、高　別）

イ　教室掲示用の「声のものさし」

（４）読解力の向上と語彙数を増やす取組

ア　児童が本を読みに行きたくなる、学校図書館づくり。

イ　業前時間の「一斉読書日」を増やした。

発表のしかた（教室掲示用）

７　授業改善を通しての取組

（１）第３学年算数科研究授業

３年　研究授業

平成２４年６月２１日（木）授業者　土屋智治 教諭

○題材名　「たし算とひき算の筆算」

○説明する力を身に付けさせるための手立て

・ワークシートを活用する。

・パターン化した方法で、発表させる。

・グループ内での発表を取り入れ、発表に慣れさせる。

○研究協議会で出た主な意見や感想

・説明する力を身に付けさせるための一つの方法として、ワークシート活用の意義は大きい。今日のことをたたき台としてもっと研究を深める必要がある。

（２）第４学年理科研究授業

４年研究授業

平成２４年１１月３０日（金）授業者　邊見　梓 教諭

○単元名　「水のすがたとゆくえ」

○説明する力を身に付けさせるための手立て

・結果だけではなく、過程や理由も発表するように指導する。

・グループ内での発表を取り入れ、発表に慣れさせる。

・発表用ヒントカードを活用する。

○研究協議会で出た主な意見

・結果だけを発表している児童には、必ず、切り返しの質問をして、理由や結果が出るまでの過程を聞いているところがすばらしかった。

８　研究の成果と今後の課題

（１）成　果　　・特に、算数科や理科では、結果や答えのあとに、考え方や理由まで付けて発表する児童が増えてきている。

（２）課　題　　・説明する力は、読解力や語彙数と関連が深い。説明する力の基礎・基本となる読解力の育成や語彙数を増やす取組を更に充実させる必要がある。

（担当　教諭　石森澄治）

『子どもたちがせいいっぱい運動に取り組む体育の授業づくり』

秩父市立花の木小学校

１　研究主題設定の理由

学校教育目標「気づき　考え　やりぬく子」の具現化を目指し、研究に取り組む。

◇児童の実態から

昨年度の新体力テストでは、埼玉県標準値と比較し全校で９２．７％上回る結果となった。しかし運動好きな児童とそうでない児童の二極化傾向が見られる。

◇社会情勢から

児童を取り巻く社会が急激に変化する中、児童の学力低下への懸念、道徳心の低下、体力の低下などが学校教育の今日的な課題となっている。

この課題解決に向け、学ぶ喜びや充実感・達成感を一人でも多くの児童に味わわせ、「生きる力」を育成するために体育授業の質的向上が必要と考え、本研究主題を設定した。

２　研究のねらい

「動く楽しさ」「伸びる楽しさ」「関わる楽しさ」「わかる楽しさ」を児童に味わわせる体育授業を目指し、授業研究を核に研究を進め体育授業の質の向上を図る。

３　具体的目標

（１）目指す児童像

ア　すすんで学習する子
イ　思いやりのある子
ウ　心も体もたくましい子

⇒「笑顔と元気、夢と思いやりにあふれた児童」

（２）研究の仮説

ア　集団行動の指導を徹底し学習規律を確立すれば、せいいっぱい運動に取り組む児童を育成できるであろう。

イ　基礎・基本を身に付け、運動の楽しさやできる喜びを味わわせるような指導を行えば、児童がせいいっぱい運動に取り組むであろう。

（３）研究の具体的な手立て

ア　全校統一の集団行動の約束を徹底する。（ハンドサイン、笛の合図）
イ　気持ちよく「ハイ！」という返事ができるよう指導する。
ウ　準備運動後に集団走を行う。（走の準備運動）
エ　本時のめあてを確認する。（何を学習するのか、学習内容の明確化）
オ　本時の主運動につながる「慣れの運動」を行う。
カ　授業の前に声かけの仕方を準備しておき、称賛、励まし、拍手など児童のよさをたくさん認める。
キ　本時のまとめを行う。（本時の学習内容のまとめ）

４　実践のあしあと

平成２３年度の実践	
５月　６日（金）校内研究授業	「跳び箱運動」６年１組　中山浩一
６月２１日（火）要請訪問	「短距離走、リレー」５年２組　野口知大 指導者　秩父市教育委員会　萩原　敦先生
６月２８日（火）研究授業	「ソフトバレーボール」　６年１組　中山浩一 指導者　秩父市教育研究所　黒田富衛先生
１１月１１日（金）要請訪問	「鉄棒、折り返しリレー」２年２組　中山浩一 指導者　秩父市教育委員会　萩原　敦先生
１１月２５日（金）要請訪問	「セスとボール」３年２組　梅沢貴史 指導者　県保健体育課　中西健二先生 秩父市教育委員会　萩原　敦先生
２月　９日（木）校内研究授業	「跳び箱を使った運動遊び」１年２組　田嶋瑞子
３月１４日（水）校内研究授業	「タグラグビー」４年１組　倉澤美香

平成２４年度の実践
４月２５日（水）、２７日（金）提案授業「バスケットボール」５年１組　中山浩一 ６月１２日（火）教育支援担当学校訪問　（低・中・高で体育授業を行う） 「とびっこ遊び、宝取り鬼」１年２組　山﨑有佳里 指導者　秩父市教育研究所　山中桂一先生 「跳び箱運動」３年２組　設樂聡子　指導者　秩父市教育委員会　萩原　敦先生 「短距離走・リレー」６年１組　梅沢貴史 指導者　秩父市教育委員会　萩原　敦先生 「短距離走・リレー」６年２組　野口知大 指導者　秩父市教育委員会　萩原　敦先生 ６月２２日（金）要請訪問　「多様な動きをつくる運動遊び」２年１組　長島三枝子 指導者　秩父市教育研究所　山中桂一先生 ７月　９日（月）校内研修　体育実技研修会 １０月３０日（火）プレ授業研究会 「ティーボール」６年１組　梅沢貴史　指導者　北部教育事務所　飯野幸和先生 「プレルボール」４年１組　関根悦子　指導者　秩父市教育委員会　萩原　敦先生 「鉄棒遊び、折り返しリレー遊び」１年１組　猪野節子 北部教育事務所秩父支所　浅賀俊也先生 １１月　２日（金）要請訪問　「プレルボール」４年２組　武藤まさみ 指導者　秩父市教育委員会　萩原　敦先生 １１月２８日（水）小学校体育連盟秩父地区体育授業研究会 「ティーボール」６年２組　野口知大　指導者　総合教育センター　長谷川雅夫先生 「プレルボール」４年３組　櫻井隆夫　県保健体育課　駒崎弘匡先生 「鉄棒遊び、折り返しリレー遊び」１年３組　赤岩淳子 北部教育事務所秩父支所　浅賀俊也先生 秩父市教育委員会　萩原　敦先生 １月３０日（水）要請訪問「フラッグフットボール」５年１組　中山浩一 指導者　秩父市教育研究所　山中桂一先生

５　実践の様子

６　研究の成果

（１）質の高い体育授業を実践するための約束づくり・環境づくりが共有できた。

（２）ワークショップ型の研究協議を行った結果、全員が発言できた。成果と課題さらに具体的な改善の手立てについて活発に意見交換できた。

（３）２年間で全員が研究授業に取り組み、体育授業について実践的理解が図れた。

（４）学年・ブロックで協力のもと、授業づくりに取り組むことができた。

７　今後の課題

（１）年間指導計画の工夫改善

（２）体育授業の環境整備　（担当　教諭　中山浩一）

「言語活動を充実させ、
児童の思考力・表現力を伸ばす指導方法の工夫」

秩父市立西小学校

１　主題設定の理由

本校の児童は、素直で、言われたことにまじめに取り組むが、「自分の意見を述べたり書いたりすることが苦手である。」「言葉遣いが乱暴なところがあり、友達とコミュニケーションを図りづらい。」といった傾向がある。つまり、思考力や表現力に課題があると言える。

そこで、言語活動を充実させることで、これらの力を伸ばすことができるであろうと考え、取り組んできた。

２　研究の概要

（１）課題解決に向けた授業研究

ア　年３回の授業研究会を中核とし、学習指導の充実と改善を図る。

イ　授業における言語活動の充実を図る取組について研究・検討する。

（２）「思考力・表現力」の基礎を養う取組

ア　図書室の整備、親子読書、読み聞かせボランティアの活用など、児童が読書に親しむ環境を整え、読書活動を積極的に推進することにより、理解力や表現力の基礎を養う。

イ　「家庭学習の手引き」を作成したり、各学期に「家庭学習がんばろう週間」の取組を行い、家庭での学習習慣を確立し、基礎的･基本的な学習内容の確実な定着を図る。

ウ　「はっぴょうじょうず」「発表サポート」等の掲示物を活用し、児童が発表しやすい環境をつくる。

３　授業における具体的な取組

（１）第１回授業研究会（７月３日実施）

ア　第５学年１組　国語科「自分を中心人物にして物語を書こう」

（指導者　武井祐子　教諭）

イ　研究の視点

「書くことに視点をあてた授業実践」

ウ　具体的な取組

○指導方法の工夫

・学習の序盤に４コマまんがを取り入れ、物語の流れを考えスムーズに考えられるようにする。

・「お話し読み聞かせ会」をするという目的意識を持たせ、どんなことを学習していくのか明確になるようにする。

・言葉集めをし、語彙力を高めるようにする。

○視聴覚機器の利用

・プロジェクター等の視聴覚機器を利用し、視覚による理解ができるようにする。

（２）第２回授業研究会（１０月４日実施）

ア　第４学年２組　国語科「一つの花」

（指導者　青山千晶　教諭）

イ　研究の視点

「グループでの話し合い活動を重視した授業実践」

ウ　具体的な取組

○表現読みのための音読

・句読点や文末表現に気を付けて正確に読むために、音読カードを活用した。

・内容の正しい理解のために全文視写を行った。

○グループでの話し合い活動
・ペアでの対話学習
・グループ学習
・クラス全体での意見交換学習（相手の考えに耳を傾けて共感する態度を育む）
○ワークシートの活用
・内容をおさえて、正しく読み取る。
・課題を理解し、見通しを立てて学習に取り組む。
・自分の考えをもち、文に書いたり、発表したりする。

（３）第３回授業研究会（１１月６日実施）

ア　第１学年２組　国語科「りすの　わすれもの」
（指導者　金井裕子　教諭）

イ　研究の視点
「登場人物の気持ちを想像して、読む力を育てる授業実践」

ウ　具体的な取組

○資料の作成
・掲示物を作成し、前時までの学習の流れを視覚的に捉えさせる。
・お面を活用して発表意欲を高め、登場人物の気持ちに近付けさせる。
○ワークシートの工夫
・児童の実態に合わせたワークシートを作成し、キーワードを正しく視写させる。
・グループ学習
・絵と吹き出しを用いたワークシートで、登場人物の気持ちになって表現しやすいようにする。
○動作化
・言葉だけではなく、体で表現することで場面を生き生きと捉えさせる。

４　成果と課題

（１）研究の成果

ア　目的意識を持たせることにより、読む人を引きつける面白い文章を書こうという意欲が高まった。
イ　擬態語や情景描写など、日頃読んでいる本の中から語句を抜き出す言葉集めにより、語彙が多くなり、言語能力が高まった。
ウ　全文視写で場面の様子や展開をとらえ、音読練習を続けることにより人物の心情に迫る表現読みができるようになった。
エ　自分の意見を書いた後、話し合いをもとに、課題についてさらに深めた意見をまとめることができた。
オ　掲示物を使うことで本時への導入がしやすく、登場人物の動きや関係、話の流れを捉えさせやすくなった。
カ　吹き出しを用いたワークシートに記入することで、その人物の気持ちになりきって表現することができた。

（２）今後の課題

ア　「表現を工夫する」ということを日々継続して積み重ねていく。
イ　各教科の目標を実現させるために、言語活動を取り入れ、児童の思考力・表現力を高めていく。
ウ　国語科では、「単元を貫く言語活動」を意識し、改善・工夫を図っていく。

（担当　教諭　大澤　伸一）

「豊かな心を育み、確かな力を付ける」
～思いやりの心と伝え合う力を求めて～

秩父市立南小学校

1　研究主題設定の理由

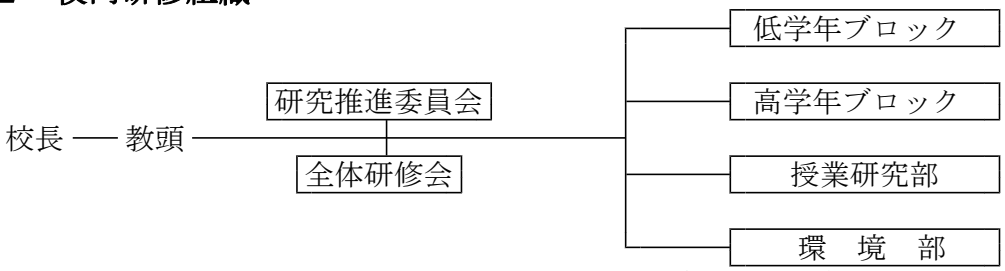
平成２３年度の反省により、本校の児童には、あいさつ・返事・場に応じた言葉遣い等に課題がみられた。そこで、話す・聞く・伝える等を身に付けさせることを通して、本校の課題解決にせまりたいと考え、本主題を設定した。

仮説（１）○日々の「あいさつ・返事・発表」等を繰り返し指導することで、コミュニケーション能力を高め、学習規律の定着を図ることができるであろう。

仮説（２）○友だちとの関わりや言語活動を、より充実させることにより、思いやりの心や伝え会う力が豊になるであろう。

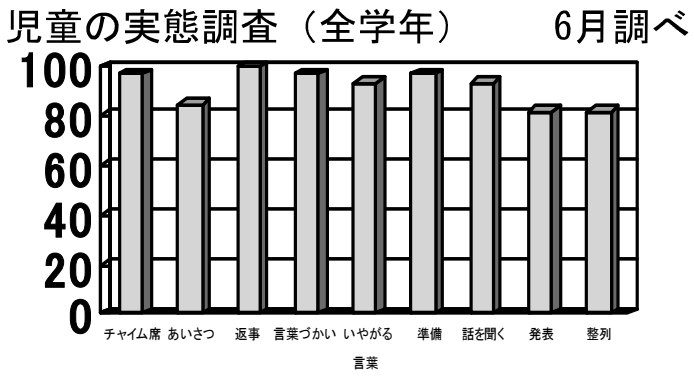
ということで、本年度は学習規律を中心に校内研修を進め、来年度は言語活動の向上を目指すという二カ年の計画を立てた。

2　校内研修組織



校長を中心として校内研究推進委員会を立ち上げ、校内研修の企画・運営や研究授業の企画提案等を行った。研究部会として授業研究部と環境部の２つを組織し、全教員がどちらかの部会に属する組織とした。学年ブロックは要請訪問の授業研究を中心に研究を行った。

3　児童の実態



チャイム席は９２％の達成率でおおむねよくできているが、あいさつについては８５％と数値がやや下がる。特に高学年になると、あいさつが良くできない児童が増えてくる傾向にある。その他の項目は９０％の平均を超えているが、発表の項目については、８２％と発表を苦手とする児童が、４０名程度いることがわかった。

授業のはじめと終わりのあいさつの徹底（全校統一）

低学年		高学年	
（はじめのあいさつ）日直が	全員が	（はじめのあいさつ）日直	全員が
・*姿勢を正しくして下さい。*	・*はい。*	・*気をつけ。*	・*はい*
・*れい。*	・*お願いします*	・*れい。*	・*お願いします。*
（終わりのあいさつ）	（黙礼する）	（終わりのあいさつ）	（黙礼する）
・*姿勢を正しくして下さい。*	・*はい。*	・*気をつけ*	・*はい*
・*れい。*	・*ありがとう*	・*れい。*	・*ありがとうございました。*
・*ありがとうございました。*	*ございました。*		

４　各部の取り組み

（１）低学年ブロック　平成２４年１０月２２日（月）５校時

第１回要請訪問　第２学年２組　道徳　主題名「ありがとう、おかあさん」

２－（４）尊敬・感謝　４－（３）　授業者　岩城　清美　教諭

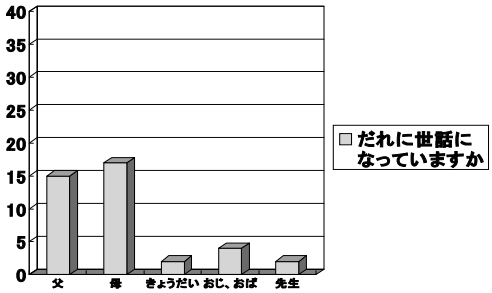
資料名　「きつねとぶどう」（出典　学研）

本主題の内容項目２－（４）「じぶんを育ててくれる人々の愛情に気付き、感謝しようとする心情をそだてる」ことをねらいとし、身近な人々の行為や善意・愛情を感じ取らせ、感謝の気持ちの大切さをもたせることをねらいとする。

挙手の仕方、発表の約束、「ありがとう」コーナーの設置・・・・これは

感謝の気持ちをカードに書いて設置された箱に入れるというものである。

カードを使うことにより友だちづくりができるようになった。



教育研究所　山中　桂一　指導主事のご指導

ノーベル賞受賞者　山中教授の言葉　「Ｖ＆Ｗ」　最終的にどんな子どもたちに育てるのか、ビジョンをもつことが大切である。

（２）高学年ブロック　平成２４年１１月１９日（月）５校時

第２回要請訪問　第４学年２組　国語　単元名「ごんぎつね」

場面の様子を想像して読む　　授業者　大王　聖也　教諭

新見南吉　作　「ごんぎつね」は、ひとりぼっちのごんと兵十の様子や、気持ちの移り変わりの表現が多く書かれており、心の動きに関しての描写も多いため、子どもたちが登場人物の心情に着目しやすい作品である。

全員一斉での群読

「声のものさし」の表示

「発表の約束」の表示

板書の仕方・・・チョークの使い方、わかりやすい板書

ワークシートの生かし方

教育研究所　山中　桂一指導主事のご指導

- 児童の音読が大変良くできている。
- 作品を読むときに、「作品の心」にふれることが大切である。
- 物語作品は人物、場、時が大切である。
- 作品が何を訴えたいかを確かめておくことで、理解の深まりが出る。
- 児童の一つ一つの言葉、発表を大切にしたよい授業でした。

日々の「あいさつ・返事・発表」等の繰り返し指導

児童の日常でのあいさつ・返事・発表については、毎日の繰り返しの指導が大切である。朝のあいさつから始まり、友だちどうしの明るいあいさつ、授業中の発表、話を聞く姿勢、基本的なことであるが大切なことである。毎日の登下校も班長を中心として集団の質の向上に努めた。学級づくりをすすめるにあたっても学習規律が基本である。そのことにより学習集団の質も高まっていった。これからも基本的なことから定着を図り、学習効果を高めていきたい。

（担当　教諭　宮嶋　達夫）

学力向上を図り、一人一人に説明する力を身につけさせる指導法の工夫
―― 算数科を中心に ――

秩父市立尾田蒔小学校

1　テーマ設定理由

（１）　児童の実態から

○自分の思いを素直に表現できない児童が多い。

○発表する時の声が小さい児童が多い。

○じっくりと考えることが苦手な児童が多い。

（２）　保護者の要望から

○基礎・基本をしっかりと身につけて学力を高めてほしい。

（３）　新教育課程から

○児童の思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から、言語活動の充実が必要である。

2　めざす児童像

（１）　学校全体のめざす児童像

自分の考えをしっかりと説明できる子

（２）　低・中・高学年別のめざす児童像

低学年…自分で考え発表できる子

中学年…自分の考えをもって、順序よく説明できる子

高学年…自分の考えを相手にわかるように説明できる子

3　研究の仮説

○　基礎・基本を確実に身につけていけば、発表への自信や意欲も高まり、説明する力が育つであろう。

○　理由や根拠をはっきりさせて説明する経験を積ませれば、説明する力が育つであろう。

○　算数的活動を工夫し、自力解決や検証の場面において、じっくり考えさせれば、説明する力が育つであろう。

○　全教育活動で言語活動を積み重ねていけば、表現力が鍛えられ、説明する力が育つであろう。

4　研究の手だて

○基礎・基本の定着

・繰り返し指導　・ドリル学習の徹底　・補充指導　・定着の確認　・家庭学習の充実

○授業の充実

・算数的活動の工夫　・考えさせる時間の確保　・ＴＴや少人数指導、習熟の程度に応じた指導の工夫　・ペア学習やグループ学習の充実　等

○言語活動の充実

・発表する機会の確保　・話し合い活動の確保　・朗読集会　・朝や帰りの会の工夫　等

○基本的な学習習慣の育成

・姿勢、聞く、返事、学習の準備　　等

○家庭地域との連携

・家庭学習の習慣化

5　専門部の取組

（１）　授業研究部

○研究テーマや学力向上にせまる工夫や手だてを考える。

・学習指導案の形式見直し　・基本的な授業の流れ見直し

・「ペア学習・グループ学習の約束」の作成

（２）　学習環境部

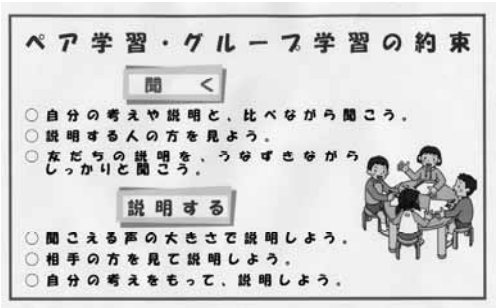
○児童の意欲を高める学習環境の整備に努め、学力の定着を図る。

・算数コーナーの設置

（３）　調査統計部

○算数科における児童の実態把握に努める。

・算数科アンケート作成、実施

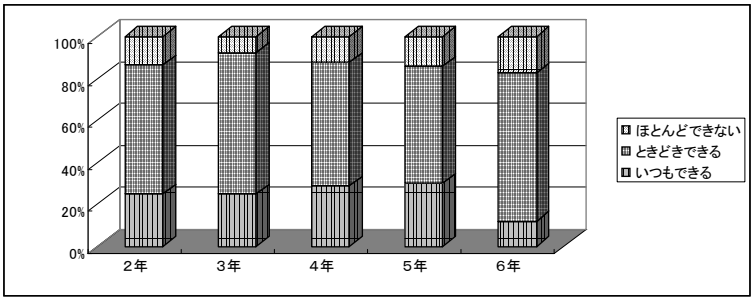


ペア学習・グループ学習の約束

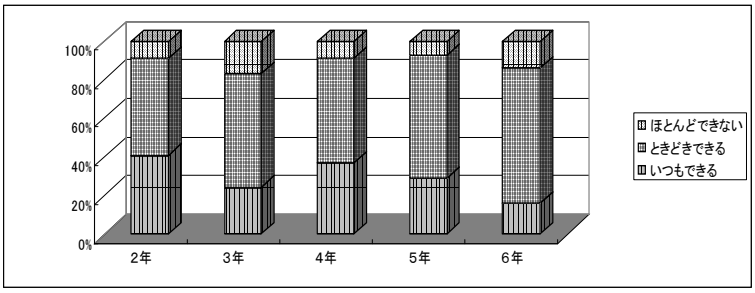
算数アンケート結果抜粋

○進んで自分の考えを発表できていますか。

平成２４年６月実施



平成２４年１２月実施



・「ほとんどできない」児童は、学年があがるに従って増える傾向にある。
・学校全体では、「ときどきできる」を含めると約８割の児童が自分の考えを発表できている。「いつでもできる」児童の割合を日常の指導の充実を図り増やしていきたい。
・６月に実施したものと比べると、「ときどきできる」の割合が減って「いつでもできる」の割合が増えている。
・「ほとんどできない」の割合は、３年生以外は減っている。

6　授業実践

低学年ブロック

２年ＴＴ指導
（ペア学習）

中学年ブロック

３年習熟度別指導

高学年ブロック

５年ＴＴ指導
（考えを説明）

7　成果と課題

【成果】

○自力解決の時間を十分確保し、自分の考えをじっくりとまとめる時間をとった。そのことにより自信をもって説明できていた。
○ペア学習を積極的に取り入れたことにより、全員が発表する場ができて授業への参加意欲が高まった。
○「ペア学習やグループ学習の約束」を作成し、掲示したことにより、児童は意識して取り組めた。
○重要単元についての掲示物を作成し、授業で活用することができた。

【課題】

●日頃から継続的に言語活動を充実させていきたい。
●ペア・グループでの学習をさらに取り入れ充実させることにより、説明する力を高めていきたい。
●発表に適した声を身につけられるよう、「声のものさし」を活用するなど、指導を工夫していきたい。
●しっかりと説明できるようにするための手だてや指導方法についてさらに研究を深めていきたい。、

（担当　教諭　田嶋　昇）

『 自分の考えをもち、伝え高め合う学習活動 』

秩父市立原谷小学校

1　はじめに

本校では「教育に関する３つの達成目標」を推進し、学校の教育目標の具現化を図ることで、児童に「生きる力」を身に付けさせることを目指している。

そこで、児童や地域の実態、保護者・教師の願い、地域社会の変化や社会的要請などをもとにして研究主題を『自分の考えをもち、伝え高め合う学習活動』とした。本年度の研究においては、主として算数科を中心として全校で取り組んだ。

2　研究主題達成に向けての具体的取組

（１）「算数科」での取組内容

ア　各時間のめあてとまとめを板書する。

イ　児童が自分で考える場面、みんなで考える場面を取り入れた授業を展開する。

ウ　既習事項を活用して、説明できる力を付けさせる。

エ　計算の学習で、「３つのけ（K）」を習慣化させる。
　（見当・計算・検算：逆算の活用）

オ　基礎的な計算力を確実に身に付けさせるよう、反復学習の時間と場を設ける。

カ　習熟度別少人数指導を核として、個に応じた指導方法・指導体制の工夫改善をする。

キ　適切な家庭学習を積極的に取り組ませる。小中連携による集中学習期間を設置する。

（２）算数科における授業研究

ア　算数科授業のポイントについての研修（５月２１日）
　講師：設樂校長

イ　要請訪問における研修

（ア）第１回要請訪問授業研究会（６月１５日）
　＜第５学年＞
　＜小数のわり算＞※少人数学習（習熟度別）
　＜研究テーマとの関連＞
　・立式の根拠を視覚的にとらえ理解させる。
　・「小数÷小数」の計算の仕方を整数の計算に帰着して考え、友だちの考えを基に、計算のやり方について話し合いを行う。
　・ノートや既習の教科書を拡大表示することで発表の手がかり、既習事項を想起させるために、視聴覚機器を活用する。

（イ）第２回要請訪問授業研究会（１０月２５日）
　＜第２学年＞
　＜かけ算の意味＞※ＴＴによる指導
　＜研究テーマとの関連＞
　・よい問題を提示し、提示方法を工夫する。
　・ペア学習を取り入れる。
　・児童の反応例を取り上げる順序やＴＴ指導を生かした話合い活動をさせる。

（ウ）第３回要請訪問授業研究会（２月５日実施予定）
　＜第３学年＞

ウ　ブロック別における研修

（ア）第１回校内授業研究会（１０月１０日）

＜第１学年＞

＜たしざん＞

＜研究テーマとの関連＞

・算数ブロックなどの半具体物を用いた操作活動を取り入れる。

・操作したことを言葉で表現させることで理解を深めさせる。

・自分の考えを発表し、友だちの考えを聞くことにより、表現する力をはぐくむ。

（イ）第２回校内授業研究会（１１月２日）

＜第４学年＞

＜面積のはかり方と表し方＞※少人数学習（均等割り）

＜研究テーマとの関連＞

・図で示された考えを式に表現するだけでなく、式から考えを読み取って図に表す活動を取り入れる。

・全員が自分の考えを発表したり、友だちの考えを聞き合ったりする場面を設定する。

（ウ）第３回校内授業研究会（１月１６日）

＜第６学年＞

＜場合の数＞※少人数学習（均等割り）

＜研究テーマとの関連＞

・多様な方法で自力解決し、ノートの拡大提示を基に発表し合い、それぞれの方法のよさを話し合う。

・学習のまとめを自分の言葉でノートに書き、自分の思考を深める。

（３）外国語活動における授業研究

秩父市外国語活動研修会（１１月９日）

指導者：北部教育事務所秩父支所　学力向上推進担当指導主事　二ノ宮辰雄　先生

授　業：第６学年３組

＜研究テーマとの関連＞

・視覚に訴えかける授業展開

・コミュニケーション能力の素地を育成するための活動

３　成果と課題

（１）研究の成果

ア　年３回の要請訪問を算数科で行った。秩父市教育研究所指導主事を要請しご指導を受けることで、研究テーマを深め、授業改善へとつなげることができた。

イ　１時間の流れを明確にした授業が多くなった。その結果、児童が積極的に学習する姿が増えてきた。

ウ　問題解決的学習の授業が効果的に展開されるようになった。

エ　授業研究を通して、学年・ブロックでの協力体制の充実が図れた。

（２）今後の課題

ア　学習過程の中で「ねる・ねりあげる」場面を重視し工夫していくことで、児童の読解力・思考力・判断力などの向上につなげていく。

イ　授業における効果的な視聴覚機器の活用について、今後も研究を深めていく。

４　おわりに

『自分の考えをもち、伝え高め合う学習活動』とするためには、研究授業を中心とした研修が効果的である。同時に、学習規律や学習習慣・家庭学習の定着も重要である。今後も教育に関する３つの達成目標をさらに推進し、研究主題にせまれるよう全職員で取り組んでいきたい。

（担当　主幹教諭　野口泰明）

「確かな学力（基礎・基本）を身につけ、知力にあふれ生き生きと活動に取り組む児童の育成をめざして」
－読解力・表現力の向上をめざす実践を通して－

秩父市立久那小学校

1　はじめに

本校は、研究主題を「確かな学力（基礎・基本）を身につけ、知力にあふれ生き生きと活動に取り組む児童の育成をめざして」　―読解力・表現力の向上をめざす実践を通して―とし、国語科を中心として研究に取り組んできた。

2　研究の構想

学校教育目標
◎豊かな心を持ち、自ら気づき、考え、行動できる児童の育成
○なかよく
○かしこく
○たくましく

研　究　主　題

「確かな学力（基礎・基本）を身につけ、知力にあふれ生き生きと活動に取り組む児童の育成をめざして」　―　読解力・表現力の向上をめざす実践を通して　―

主　題　設　定　の　理　由

全国学力・学習状況調査の結果や本校の児童の実態から、さらに読み書きや発表の技能を高めるとともに、基礎基本を確実に定着させるため、言語活動を充実することが大切であると考え、本研究主題を設定した。

研　究　の　仮　説

読解力と表現力のねらいを明確にし、読み取ったことを表現させる授業を展開していけば、知力にあふれ生き生きと活動に取り組む児童の育成が図れるだろう。

①読み・書きなどの基礎的、基本的な内容をくり返し学習することで基礎学力が定着するであろう。
②各教科・領域を通して「読む力と書く力の育成」に努めれば、文章を理解し、読み取りができ、自分の考えを表現できる児童が育つであろう。
③「久那っ子発表の仕方」「声のものさし」などにより学習規律を確立することにより、落ち着いて学習に取り組むことができるであろう。
④「音読カード」「全校漢字テスト」「音読発表」「視写活動」「読み聞かせ」などの「全校的活動の推進」に努めれば、読み書きや発表の技能を高め、基礎・基本を確実に定着させ、読解力向上につながる基盤をつくることができるであろう。
⑤多くの本とふれ合えるように、「読書活動の充実」に努めれば、読書する習慣が身につき、読解力を深く支える基礎的な力が育まれるであろう。
⑥言葉に対する興味を持たせ、それを調べる環境を整えれば、言葉に対する理解が深まるであろう。
⑦自分の思いや考えを書いてまとめる場を確保すれば、自分の考えをじっくりと考え直しながらまとめていくことができるであろう。
⑧伝えたい相手を決めて、発表の場を工夫すれば、相手意識を持ち、自分の考えを表現しやすくなるであろう。

研　究　の　内　容

ア　場面の様子がよく分かるように読みを深めさせるための手だて（省略）
イ　順序よく自分の考えをまとめるための手立て（省略）
ウ　相手を意識し表現させるための手だて（省略）
エ　全体を通しての手だて（国語の力を高めるための補助として）（省略）

3　具体的な取組

低・高学年別に２度の研究授業を実施し、全員で研究協議を行い、授業の質を高め、授業改善に取り組んだ。また、日々の授業に生きる約束の検討や、国語力の向上に結びつく学校全体での取組を実施した。

（１）低学年の取組（物語文）
第２学年　じゅんじょや様子を考えて読む　「さけが大きくなるまで」

ア　具体的な手立て(主なもの)
○読み方の工夫（範読の後に続いて読む、段落読みなど）
○本や体験からわかったことを順序カードに書いてみる。
○複数での話合い活動

イ　成果
○掲示資料の活用により、順序よく考えをまとめることができ、自信をもって発表することができた。
○自作ワークシートを作成したことで、学習を焦点化することができた。

＜第２学年要請訪問＞
○「久那っ子発表の仕方」「声のものさし」の徹底を図ることができた。
○毎日、音読カードを活用することで、自信ある読みができた。

（２）高学年の取組（物語文）
第５学年　生き方をみつめて読む「大造じいさんとがん」
ア　具体的な手立て（主なもの）
○音読の工夫
一斉読み、グループ読み、暗誦、群読などを取り入れ、指導場面によって効果的な読み方を選択した。
○国語辞典の活用
国語辞典を常用し、難語句等を調べることにより、いっそう理解を深めるように使うことの習慣化を図った。
○「久那っ子発表の仕方」の徹底。
○相談タイムの取り入れ
グループや他の児童との相談タイムを取り入れることにより、自己の考えを述べ合うことで、自信を持たせたり同様の考えを共有させたりした。

＜第５学年要請訪問＞

（３）全校の取組(主なもの)
ア 音読カード（通年）
イ 朝読書（金曜日朝自習）
ウ 家庭学習の手引きの作成と活用等
エ 読み聞かせ（本読みボランティア）
オ お話の会（市立図書館よりＧＴ）
カ 学力アップタイム（水曜日朝自習）
キ 群読発表（各学年）
ク 各教室国語コーナーの活用
ケ 音読発表　　など

＜お話の会＞

＜感動体験作文発表会＞

４　成果と課題

（１）研究の成果
○研究の成果による指導法の改善により、児童の興味・関心と読解力や表現力を向上させることができた。
○理解力を高めるワークシートの作成方法や視聴覚機器の利用法を教師自身が身につけることができた。
○児童が家庭学習や自学について、よりよく取り組めるようになった。
○ボランティアによる読み聞かせ活動や音読発表により、国語に対する興味・関心をいっそう高めることができ、読書好きの児童が育ってきた。
○全校での３つの達成目標では、「読み・書き」９７％、「計算」９７．９％を達成した。

（２）今後の課題
○全国学力学習状況調査や埼玉県学習状況調査等の検証分析により、主として話すこと・聞くこと、目的に応じて書くことに課題があることがわかっている。そのため、話の中心を的確に聴き取ることや辞書の日常的な利用、配当漢字の読みの力を高める音読と視写の奨励や視写したことの点検を実施し、実践化していくことが大切である。

５　終わりに

今年も、学校課題の解決に向けた実践ができた。少人数だが全職員の協力により、密度の濃い研究をすることができた。また、持てる教具の活用により、楽しく実りある研修にすることができた。今後も更に深まる研修にしていきたい。

（　担当　　教諭　　齋藤　春則　）

「学ぶ楽しさを味わわせ、確かな学力を身につけさせる学習指導」
～言語活動を充実させる取組を通して～

秩父市立高篠小学校

１　主題設定にあたって

本年度の研究主題は、『学ぶ楽しさを味わわせ、確かな学力を身につけさせる学習指導』とし、「言語活動を充実させる取組を通して」を研究の中心として研修を進めた。

（１）確かな学力を身につけさせる指導の充実

基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を活かす教育の充実に努めた。

（２）言語活動の充実について

知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われることなどから、学習活動の基礎に言語に関する能力を位置付ける必要がある。また、言語は論理的思考だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心をはぐくむ上でも、言語に関する能力を高めていくことが重要である。

本校では言語活動を充実させる取組を実践した。

２　研究の内容

（１）言語力を高める授業の改善

ア　言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において、言語活動を充実させるように計画の中に位置付けた。

イ　研究授業・公開授業を実施した。

（２）言語活動を充実させる日常の取り組み

ア　朝の会や帰りの会でスピーチを行った。

イ　日記、作文において効果的な構成や表現を考えて文章を書いた。

ウ　読書活動を充実させた。（各学年の必読書の読破、朝読書の充実、読み聞かせの実施）

エ　教師の話し方、教室掲示等の言語環境を整備した。

（３）校長講話を活用した「聞く・書く・話す力」の育成

ア　月１回の校長講話を聞き、感想を書き、家の人に話す活動を実施した。

イ　日常生活の中で意識して聞き取ること、聞き取ったことを書き表すこと、さらに話すことを通して「聞く・書く・話す力」を育成した。

ウ　「校長先生のお話を聞いて」のたよりを家庭に配布し、家庭でも話し合う機会をつくった。

（４）音読発表会の実施

ア　各学年で詩や短文を選び、朝学習の時間に音読の練習をした。

イ　教育週間時に音読発表会を実施し、学年毎に発表した。

３　言語活動を充実させる授業研究会の実施

（１）第１回授業研究会

ア　第５学年　社会「米づくりのさかんな庄内平野」（１０時間扱い）６月２８日（木）実施

イ　授業者　大平　正芳 教諭

ウ　我が国の米の生産の様子について、地図、統計などの資料を活用するなどして調べ、理解し、国民生活を支える米の生産の発展について考えさせた。

エ　農家の人々が共同で行っていることとその理由、自分が考えたことをノートにまとめたり、説明したりできるようにさせた。

オ　言語活動を充実させるための高学年ブロックの取組

・言語に関する掲示物の工夫・語彙力の定着や活用・漢字力の向上・国語辞典、漢字辞

典の積極的な活用・読書量の増加（読書貯金箱、朝読書親子読書）・自己表現力の向上・家庭との連携（音読・日記）・朝の会のスピーチ・音読発表会・社会科新聞づくり・他教科での言語活動（理科の観察記録、自己評価カード、レポート、学習成果のまとめ等）

（２）第２回授業研究会

ア　第４学年　国語「花を見つける手がかり」（２１時間扱い）１０月２９日（木）実施

イ　授業者　黒澤　淳子 教諭

ウ　段落と段落のつながりを明らかにして、資料を使って伝えたいことを整理させた。

エ　中心となる語や文を正しく読み取り、表や要約文にまとめさせた。

オ　言語活動を充実させるための中学年ブロックの取組

・言語環境の整備（教室の掲示物、言葉づかい、返事の指導）・語彙力の定着や活用（国語辞典・漢字辞典の活用、意味調べプリント）読書量の増加（読書貯金箱・朝読書・親子読書）・自己表現力の向上（音読練習、スピーチ、詩や短歌の暗唱、社会科新聞作り、理科観察記録、まとめの発表、作文，日記、手紙指導等）

（３）第３回授業研究会

ア　第１学年　算数「ひき算」（１２時間扱い）１１月２１日（水）実施

イ　授業者　原　由里 教諭

ウ　１１～１８から１位数をひく繰り下がりのある減法計算で、減数を分解して計算する方法（減々法）であることを知り、計算の仕方について理解を深めさせた。

エ　半具体物を用いたり、言葉、数、式、図を用いて答えの求め方を表し、自分の考え方を説明させた。

オ　言語活動を充実させるための低学年ブロックの取組

・言語環境の整備（掲示物、言葉の指導）・語彙力の向上（朝読書、親子読書）・表現力の向上（音読練習、朝のスピーチ、生活記録、観察記録・漢字の定着（漢字練習、確認テスト、学期末漢字テスト）

４　成果と課題

（１）成果

ア　低学年

・「はじめに」「つぎに」「さいごに」などの順序を表す言葉を意識して発表することができた。

・いろいろな話し合いの形態を取り入れることによって、話すことが苦手な児童の自信につながり、言語活動を充実させることができた。

・ワークシートを使って、自分の考えを書くことにより、考えを深めることができた。

イ　中学年

・大きくはっきりした声で、発表・音読ができるようになってきた。

・文章の段落ごとに要点を捉え、読み取るための学習の仕方がわかった。

・辞典の活用により、素早く単語の意味を調べることができるようになり、語彙力が向上した。

ウ　高学年

・友だちや教師に自分の言葉で説明する活動を積み重ねることで、説明する力に向上が見られた。

・まとめ方の判断基準を示し、自分の言葉でまとめる活動を積み重ねることで、書く量や内容に向上が見られた。

・見通しをもって主体的に協力し合いながら学習する活動を通して、学ぶ楽しさを味わわせ、理解を深めることができた。

（２）課題

児童に「わかった」「楽しくできた」という体験をさせながら、確かな学力を身につけさせるためには、日々の言語活動をさらに充実させ、授業の改善に努めなければならない。また、個々の児童の学習状況を把握し、理解が不十分な児童の個別指導にも力を入れ、学力の向上を図っていきたい。

（担当　教諭　宮 原 宏 成）

基礎・基本の確実な定着と学力向上を目指した学習指導の研究
〈算数科〉

秩父市立大田小学校

1　はじめに

本校の課題は「学力の向上」である。本校の平成２３年度の「教育に関する３つの達成目標」検証結果は、県平均を全学年で大きく上回っている。

しかし、これも強化週間を設けて過去問題に取り組ませたり、重点指導を行った結果であり、いつでも力を発揮できるとは限らない。事実、今年度の国語と算数の全国標準診断的学力検査の結果を見ると、全国平均を下回る学年が多い。特に算数では、基礎的・基本的なことはある程度できても、それを持続させたり、活用・応用したりすることが苦手である。

そこで、本年度も昨年度に引き続いて、算数科の基礎･基本の徹底と学力向上を目指す研究を進めることにした。

2　研究の概要

（１）研究主題

基礎・基本の確実な定着と学力向上を目指した学習指導の研究〈算数科〉

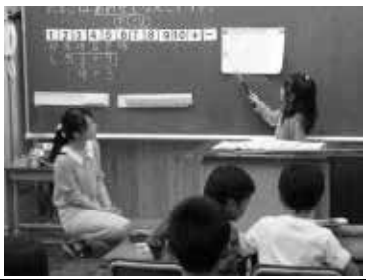
（２）研究の基本方針

① 少人数加配による少人数指導の工夫･改善を図る。
　・個に応じたきめ細かい指導の充実

② 児童が学習に意欲的に取組み、分かる楽しい授業を実践する。
　・児童が活躍でき、「できた」という喜びの味わえる授業の推進
　・算数的活動の場が工夫された授業の推進

③ 繰り返し学習・家庭学習の充実により基礎学力の向上を図る。
　・復習プリントの計画的な実施(始業後５分間等)
　・「家庭学習・読書貯金」の活用

④ 言語活動の一層の充実に努める。
　・発表する機会の確保
　・算数的活動を生かしての発表や発表ボードの利用
　・２人組、グループでの発表などの発表形態の工夫



（３）手立て

低学年	・具体物を工夫し視覚に訴える授業展開を図る。 ・計算する機会を意図的に設け指導する。(朝学習、学期末計算認定テスト等) ・算数的活動から、自分の考えをまとめ、発表できるようにする。
高学年	・単元によって習熟度別指導を取り入れ、個に応じた指導を実施する。 ・言葉や数、式、図等を用いて考えたり、説明したりする活動を取り入れる。 ・算数的活動を工夫し、考えさせる場面や発表する機会を工夫する。

3　具体的な取組

（１）要請訪問での研究授業

第１学年の実践　　１０月１８日（木）　　（岸　寛子 教諭）
○単元　「たしざん」　＜３＋９の求め方＞
○本時の目標
　一位数どうしのくり上がりのある加法計算で、被加数を分解して計算する仕方について理解を深める。

○指導方法の工夫
・基礎学力を定着させるため、普段通り「カード学習」から入った。
・ブロック操作や図や式を使ってやり方を考えさせ、自分の考えをノートに書かせた。
・自分の考えを説明させる練習をさせ、その後、２人組から全体で発表させた。
・色々な考え方の中から、「速く、簡単に、正確に」にできる方法を話し合った。
○指導・助言
・具体物を効果的に使い、児童が自分の考えをまとめることができ、発表も２人組から全体と工夫されていてすばらしい。児童も高まり、教師も高まる授業であった。
・全体会での研究協議がグルーピングのワークショップ形式でなされ、研究協議の内容が濃かった。明日から自分の授業に生かしたいことが言葉に出され、個々の力が高まる協議であった。

（２）校内授業研究会での研究授業

第５学年の実践　１２月５日(水)　Ｔ・Ｔ授業　(関口勝信教諭・柿沼隆男教諭)
○単元　「四角形と三角形の面積」＜三角形の面積の求め方＞

○本時の目標
三角形の面積の求め方を考えることができる。
○指導方法の工夫
・方眼入りの三角形を数枚と切り抜いた三角形を２枚渡し、切ったり動かしたりしながら長方形や平行四辺形に変形させて考えさせた。
・操作活動での考える時間を十分確保するとともに、ヒントカードを用意した。
・大きな発表用紙を活用し、説明をわかりやすくした。
○研究協議から
・準備もよく、考える時間が十分確保されていたので全員が自力解決できた。
・２人組での発表の時間や黒板上での操作活動ができるものがあるともっとよかった。

（３）その他の主な取組
① 「家庭学習･読書貯金」の活用・・・家庭での学習及び読書の時間を増やすため，毎日の時間を記録させ、それを貯金として累積することで意欲化を図っている。
② わかりやすい授業づくり・・・全学級で毎時ごとに「学習すること」「わかったこと」のカードを使い、目当てやまとめを明らかにしてわかりやすい授業づくりに努めている。
③ 繰り返し学習の充実・・・５分でできる程度の問題を用意し、計算や漢字の復習問題を授業に組み込んで実施している。
④ 小中が連携しての取組・・・中学校の定期テストに合わせて家庭学習集中取組期間を設定し、〔学年×１０分間〕以上を目標にして家庭学習習慣の定着に向けて取り組ませている。

4　おわりに

（１）成果
○個に応じた指導と繰り返し学習により、児童の計算力が確実に高まっている。
○操作活動を工夫するとともに、考える時間や発表の機会を確保することにより、児童ができたという喜びや満足感を味わえる授業が実施できている。

（２）課題
○文章題では、問題を読み取れないことも多いので、今後はさらに読書に力を入れて読解力や活用力を高めていきたい。

（担当　教諭　新井　敏夫）

気づき、考え、伝える子の育成

ー　言語活動の充実をめざして　ー

秩父市立影森小学校

1　研究主題設定の理由

（１）学校教育目標との関連

本校の学校教育目標は「つよい子」「あかるい子」「かしこい子」である。本校では、健やかな身体、豊かな心、確かな学力の育成に取り組んでいる。今年度研究主題を「気づき、考え、伝える子の育成」とし、言語活動の充実をめざして研究に取り組んでいる。気づき、考え、伝える力をはぐくむには、授業の中で自分の思いや考えを相手に伝える場面を多く作る必要がある。そのためには、知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われることであり、学習活動の基礎になるのは言語に関する能力である。言語活動を充実させる必要がある。また、これらは本校の学校教育目標達成につながるものと考える。

（２）児童の実態

新学習指導要領の趣旨をふまえ、学習活動を推進するには、各教科・領域での言語活動を取り入れた学習の場の工夫が必要である。そのためには、子どもたちが基礎･基本の力をしっかりと身につけ、主体的にかかわりをもちながら、自分の考えを表現していくことが重要である。

また、学習状況調査等の結果から、「読解力や文章表現力がやや不十分である」ことがあきらかになった。特に書く力、そしてそれを表現する力に課題がある。

本校では毎月朝会で校長が詩を紹介し、子どもたちがその詩を覚え、休み時間に校長の前で詩の暗唱を行う。子どもたちは、意欲的に取り組んでいる。

2　研究の概要

（１）「言語活動の充実」－言語技術と学習意欲を支えとして

ア　新学習指導要領に例示されている言語活動には、記録・報告・論述・発表・討論などがあるが、テキストを読んで自分の考えを論理的に述べる力が弱いという結果が反映されている。

イ　さまざまな言語活動を充実させるためには、それを支える基礎的な言語技術が必要になる。国語科だけでなく各教科でも、言語技術を意識して指導に当たる。

ウ　基礎的・基本的な知識及び技能の習得と活用のためには、各教科等において、様々な言語活動を通して、じっくりと取り組む。

（２）学習指導の充実と改善

年３回の授業研究会を中核とし、学習指導の充実と改善を図る。

ア　第１学年２組　国語科「ばめんのようすをおもいうかべてよむ　りすのわすれもの」（髙野敬子教諭）

低学年ブロックでは、「Ａ話すこと・聞くこと、Ｂ書くこと、Ｃ読むこと」に重点を置き授業に取り組んでいる。本授業では、「自分の考えを明確にさせるために動作化を

取り入れ、書く活動につなげる。自分の考えをみんなの前でしっかり話すことができる。」ことをねらいに取り組んだ。

「自分の考えをワークシートに書く活動を多く取りいれる。全体の前で自信をもって発表できるようにするため、ペア学習などによって練習の場を設定する。」等、言語活動充実の工夫を行った。

イ　第４学年２組　国語科　「日本語のひびきにふれる　物語の作り方をくふうしよう」

（清水勇人教諭）

中学年ブロックでは、「Ａ話すこと・聞くこと、Ｂ書くこと、Ｃ読むこと」の中で特に「Ｂ書くこと」に重点を置き授業に取り組んでいる。本授業では、「場面メモをもとにして物語の書き出しを工夫して書くことができる。」ことをねらいに取り組んだ。

「物語の書き出しを調べて紹介し合い、工夫されているところを話し合う。自分の書いた書き出しの文をグループで話し合い、表現の仕方を見直す。」等、言語活動充実の工夫を行った。

ウ　第６学年２組　国語科　「日本の文化を考える　俳句・短歌を作ろう」

（井上雅司教諭）

高学年ブロックでは、「Ａ話すこと・聞くこと、Ｂ書くこと、Ｃ読むこと」の中で、特に「Ａ話すこと・聞くこと」「Ｂ書くこと」に重点を置き授業に取り組んでいる。

本授業では、「表現の効果などについて考え、工夫して俳句や短歌を作り、語感や言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつ。」ことをねらいに取り組んだ。

「短歌や俳句の特徴にふれさせ、言葉のもつ意味を大切にして、俳句、短歌を作る作業を経験させる。イメージマップを活用し、たくさんの言葉の中から自分の思いに合った言葉を選び出し、十七文字（三十一文字）にまとめさせる。作品を友達同士で読み合い、推敲・修正していく中で創作の楽しさを味わわせ、意欲を高める。」等、言語活動充実の工夫を行った。

３　研究の成果と課題

（１）研究の成果

ア　書くことにより、思いや考えを深くとらえることができた。

イ　兄弟グループ・ペアでの発表の聞き合いで、意欲的な発表ができた。

ウ　物語や短歌・俳句を身近に感じることができた。

（２）課題

ア　自分の思いを言葉で表現することに個人差があり、その形式を指導する必要がある。

イ　読み取った内容を、表現読みまでにつなげるための手だてを工夫する必要がある。

子どもたちが基礎･基本の力をしっかりと身につけ、主体的にかかわりをもちながら、自分の考えを表現していけるよう今後もしっかりと取り組んでいきたい。

（担当　主幹教諭　石原　　明）

「接続期プログラム」の実践及び検証に係る研究

秩父市立吉田小学校

1　はじめに

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「学習指導要領」が改訂され、幼稚園・保育所と小学校の交流・連携の実施が義務付けられた。

すでに「連携」の研究・実践は各地で実施されているが、公立と私立の違いや幼稚園と保育所との違い、地理的な条件の違いなど、まだまだ多くの課題を抱えながら模索しているというのが現状である。

本校では、吉田幼稚園、吉田保育所と連携し、平成２３年度は「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方研究」により、接続期のプログラムの作成に取り組んできた。今年度は、作成した接続期のプログラムの実施と検証により、研究の実践化に取り組んだ。

2　研究内容

（１）新１年生の実態把握

ア幼稚園指導要録、保育所保育要録の活用

イ新一年生の客観的な実態把握の仕方

・スタートカリキュラム各１週毎に以下の項目で観察、記録していく。

（ア）学校生活への順応はどうか？

（下足箱、教室、机、トイレ、水道等の使い方、ランドセル、置き傘等持ち物の片付け、学習の準備、服の着脱、エプロン、帽子、給食時間内に食べられるか等）

（イ）交友関係はどうか？

（友だちに話しかけられるか、返事ができるか、会話ができるか、一人ぼっちでいないか等）

（ウ）学習への取組はどうか？

（姿勢を正せるか、先生の話を聞けるか、「ハイ、～です。」とこたえられるか、鉛筆を正しく持ち、文字や数字が書けるか等）

（エ）　給食の配膳等

（２）スタートカリキュラムの実施

ア　スタートカリキュラムを１組と２組で共同実践する。

イ　第１週は、第１週のねらい「１年生になったことを喜び、話を聞くことを少しずつ覚えながら１年生の不安がなくなり楽しく過ごすようになる。」を踏まえ、学校や学習は楽しいか、話が聞けるか、不安はあるか等記録を取り、次週に生かした。

ウ　第２週は、第２週のねらいを踏まえ、友だちやみんなと過ごすことに関心を持たせ、遊びや学習に楽しく取り組めるか、最低限の約束を守らせながら取り組み、記録を取り、次週に生かしていく。

エ　第３週、第４週もねらいを踏まえて授業を行い、取組の記録を残し、課題と成果をまとめるようにする。

オ　はじめの国語等、接続の目標と教科の目標との関連を図り、指導案を作成する。

カ　週毎に児童一人一人の「学習」、「接続」上の課題を明らかにし記録した。

キ　学校補助員はスタートカリキュラムの期間、１年担任をサポートする。

（３）スタートカリキュラムを評価・改善

ア　評価の観点は、幼児期の教育から小学校教育、小学校生活に円滑に適応できたか。

イ　評価の観点

【例】　（ア）小学校生活への適応（体）　（イ）学習への適応（知）

（ウ）友だちへの適応（徳）

ウ　平成２４年度スタートカリキュラム全体の評価

エ　平成２５年度スタートカリキュラムの作成

（４）幼稚園教諭・保育士による小学校の授業参観

ア　５歳児の担当者が月１回程度小学校低学年の授業を参観した。（楽しいゲーム）

イ　卒園・卒所した子どもの小学校での様子を把握した。

ウ　小学校生活への不適応等、課題があれば小学校と協議により、アプローチカリキュラムを作成し、実践を通じて、小学校の教育内容との接続を明らかにしていく。

（５）小学校教員による幼稚園・保育所の保育参観

ア　小学校１・２年生の担任が幼稚園・保育所を訪問し、園や所での生活や学びの様子等を参観し、幼児期の保育（教育）について予備知識を得ておく。

イ　幼児期と児童期の教育の目的は連続性・一貫性をもって構成されるが、集団教育と個人保育の違いから、新１年生が小学校の生活や学習に適応できない場合等、小学校の教育計画や指導方法を見直して作成されたスタートカリキュラムを実践し検証する。

（６）定期的な連絡会の開催
①小学校（校長、１・２年担任）と幼稚園（園長、年長担任）と保育所（所長、５歳児担当者）で定期的に連絡会を開催する。
②児童及び園児等の健やかな成長を図るため、学校や園・所が共通理解を図り、学校、園、所がそれぞれなすべきことを明確にして円滑な接続を推進する。

（７）幼児期の教育に関する取組
ア　幼児期の特性を踏まえ３年間を見通した保育
（ア）丈夫な体づくりと安全指導の充実
・進んで外遊びをする・粘り強くがんばる・安全に生活できる
（イ）基本的な生活習慣の育成
・自主自立の芽生えを培う　・進んであいさつする　・聞くこと話すことが豊かになる。・何事も自分の力で意欲的にやろうとする。
（ウ）思いやりのある幼児の育成
・集団生活を通して社会性の芽生えを培う。・良いきまりを身に付けやさしい心で友だちと関われる。・動植物の世話を通じてやさしい心を培う。
イ　吉田保育所との交流保育
（ア）吉田幼稚園は吉田保育所との交流保育を実施している。
・保育所の３歳から５歳の子どもは吉田幼稚園で幼児教育を受けている。
ウ　子育ての目安「３つのめばえ」の活用
（ア）「３つのめばえ」として県教委が示した「生活」「他者との関係」「興味・関心」の視点から現行の教育課程（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）を見直していく。

（８）小学校における接続期の工夫に関する取組
ア　幼児期の学びの芽生えから児童期の自覚的な学びへの移行をスムーズに行う。
小学校では「学びの基礎力の育成」として「三つの自立（学びの自立、生活上の自立、精神的な自立）を養うことを含め、学力の三要素（基礎的な知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に取り組む態度）を培っていく。
イ　児童の実態を考慮し、合科的・関連的な指導を行う。
生活科を中心に国語科、音楽科、図画工作科と組み合わせ、生活科と音楽科とか、生活科と国語科等の合科的な指導の在り方を研究する。
ウ　国語科では、幼稚園教育の言葉に関する内容等との関連、音楽科や図画工作科では幼稚園教育の表現に関する内容等との関連を考慮して指導する。
エ　１５分や２０分程度のモジュールで時間割を構成することも研究する。

３　研究経過一略

４　授業実践一略

（５０ｍ走ったよ）

（読み聞かせです）

（一緒にダンス）

５　おわりに
今年度の研究は、実践と検証による結果を求められているため、これまでに「接続期プログラム」の実践及び検証に係る研究連絡推進会議、秩父市校長会研修会等において、本校の取組を積極的に発表し、意見や感想を集めている。現状では学校によって多種多様な課題があり、先生方の負担も大きく、これをすべての幼稚園や学校で同じように実践するのは、かなり難しいという意見が多い。
今後、「小１プロブレム」対策として、保・幼・小の連携を次の視点に立った研究を推進していく。
１幼稚園と小学校の段差を無くすのではなく、子どもに段差を乗り越える力（＝生きる力）をつけていく。
２保育者と学校教師がお互いの教育を尊重し、理解し合う交流を実践していく。
３園・学校は地域の中にあり、地域で子どもを育てるという立場で連携を図っていく。
幼・保・小の「連携」は、できるところから始め、負担にならないように実施し、継続できる形を考えて取り組むことが、結果的に子どものための「連携」になっていくと考え、この研究の実践化に努めていきたい。

（担当　教諭　松本和雄）

「主体的に学び、確かな学力を身につける児童の育成」
～算数科における個に応じた指導の充実と、工夫・改善を目指して～

秩父市立大滝小学校

1　主題設定の理由

本校の児童は、明るく素直で学年間の枠を超えて仲がよい。学校行事や諸活動においても、一人一人が活躍できる場が多く、意欲的に取り組み協力し合える。また、豊かな自然環境の中で生活しているため、自然に対する興味・関心も高い。

しかし、極めて少ない人数での学習になるため、様々な意見を出し合って、自分の考えを深めていく場が少なく、新たな考えや方法を生み出したり、切磋琢磨して互いの力を高め合ったり、学び合うという経験が少ない。また、自ら問題意識を持ち、多様な方法で解決したりしようとする意欲も十分とはいえない。このことは、全国や県で実施している学力調査等の結果からも伺え、算数科においては得た知識を活用する力に課題があることが判明した。そのため、算数科に焦点を置き基礎基本の学力を高めることはもとより、自ら学び追究していく力「主体的な学び」に着目し、研究を推進することとした。

2　研究の仮説

（１）問題解決学習が身につけば、主体的に学ぶ態度と能力が育ち確かな学力が身につくであろう。

（２）個々の能力に応じたきめ細やかな指導を行えば、基礎基本の学力が定着するであろう。

（３）へき地の教育力を生かした地域・保護者との連携を推進すれば、確かな学びの土台づくりができるであろう。

3　研究内容

（１）主体的な学びを育む指導法の工夫・改善

（２）個々の能力に応じたきめ細やかな指導の充実

（３）確かな学力の定着を図るための環境の整備

4　研究の経過と取組

（１）研修計画の決定

・研修の方向性について

・へき地小規模学校学習指導研究協議会に係る内容について

（２）副研究主題、研究組織の決定

（３）研究主題、副研究主題の意味の共通理解等

（４）全体会における研究推進

・学習の土台づくりについて

（学習規律・家庭学習のてびき・家庭との連携協力・小中の連携）

・学習指導過程の工夫改善について（みつみね学習による問題解決学習の深化）

・諸調査・検査の集計分析について

（個々の能力・分析に基づくきめ細やかな指導の充実）

・日課表の工夫について

（学力アップタイムの活用等）

・確かな学力の定着を図る環境整備について

（算数コーナーの設置・言語活動の充実・郷土学習の充実）

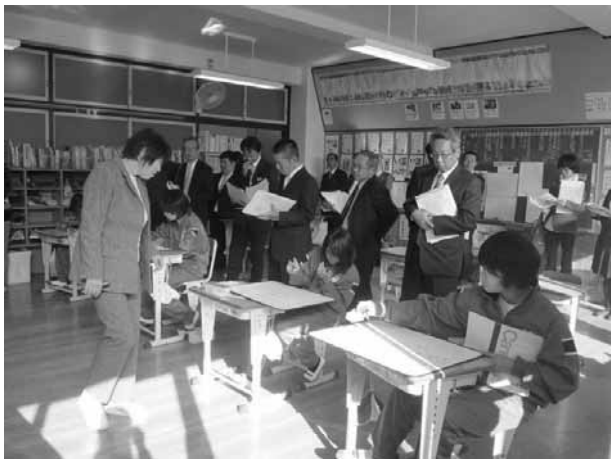
・要請訪問等公開授業における授業実践による研究推進

（算数科における指導内容・指導計画の工夫改善）

5　成果と課題

（１）**主体的な学びを育む指導法の工夫・改善**

成果



○問題解決過程を明確にしたことにより、見通しをもって学習に取り組み、自力解決できた達成感を味わうことができた。

○「みつみね学習」を継続して行うことで、学習段階を明確にし、それぞれの児童が自分なりの方法で問題を解決する力が育ってきている。

課題

○様々な場面で言語活動の充実に取り組んできたが、さらに、意見を出し合ったり、自分の考えを深めたりすることができるようにしたい。

○多様な考えを出し合ったりすることにより、児童の思考力が高まってくるので、既習事項が次の学習のステップとなるよう継続して指導していきたい。

（２）**個々の能力に応じたきめ細やかな指導の充実**

成果

○授業において、具体物等を意図的に用いたり、測定活動を実際に行ったりする体験的な理解を図る授業展開が多くできた。そのことにより、児童の学習理解が高まった。

○児童が必要であろうと思われるヒントカード等を準備したことにより、児童の多様な考えを引き出すことができた。

課題

○基礎的、基本的な学習内容の定着は図れているが、多様な考え方を発表し合い、思考を深めるところまでいたっていない。

○自力解決した結果をみんなの前で発表することや、聞き合うことにも慣れてきているが、十分とは言えない。さらに自分の考えをもっと深められるよう支援していきたい。

（３）**確かな学力の定着を図るための環境の整備**

成果

○学習規律を設定し継続指導したことにより、児童の授業への集中度が高まってきている。

○「家庭学習の手引き」を配布したことにより、家庭学習の内容や取り組みが充実し、家庭の協力を得ることができ、基礎的、基本的なが確実に定着するようになった。

課題

○家族日課表の作成を、全家庭に発展させることができなかった。さらに今後も家庭との連携協力に努めていきたい。

○中学校との連携を意識し、小学校での取り組みと、中学校の取り組みを共通理解しながら、授業規律等の統一を図った。さらに、年間指導計画等、学習指導分野でも統一性を図れるよう研究を深めていきたい。

（担当　教諭　設楽尚孝）

学力向上と豊かな心の育成
～言語活動の充実をとおして～

秩父市立荒川東小学校

1　はじめに

荒川地区では小・中３校で合同研修や連絡会が行われ、各校の児童生徒の学習状況調査の分析、校内研修の成果と課題等を共通理解している。そして、よりよい教育実践を話し合い、地域全体の教育力向上を図っている。今年度は、小・中連携の大きな柱として、学力の向上と豊かな心の育成を図ることにしている。

2　研究の概要

（１）主題の設定の理由

県学習状況調査等から本校の児童は､自分の考えを書いたり説明したりする力に課題がある。そこで、荒川３校で話し合い、「学力向上と豊かな心の育成」を主題として研究をすすめていくことにし、本校では言語活動をより一層充実させながら主題に迫ることにした。日々の授業で小集団の学習活動を多く取り入れていくことで思考力・判断力・表現力が高められたり、家庭や地域と連携することで学力向上と豊かな心の育成が図られたりできるだろうと考えた。

3　全体の構成

今年度の本校課題　　自分の考えを書いたり説明したりする力

↓

研究主題　　学力向上と豊かな心の育成　―言語活動の充実をとおして―

・日本国憲法
・教育基本法
・学習指導要領
・埼玉教育プラン
・秩父市教育プラン

学校教育目標
助け合う子　元気な子　進んで学ぶ子

○児童・地域の実態
○家庭・地域の願い
○児童・教師の願い
○社会の変化
○社会の要請

荒川東小学校　研究主題
学力向上と豊かな心の育成
～言語活動の充実をとおして～

《実態の把握と調査》
「教育に関する３つの達成目標検証」や「埼玉県学習状況調査」、「全国学力・学習状況調査」、「全国標準学力テスト」等で「言語活動」に係る実態を調査し、変容をみる。

《荒川東小学校のめざす児童像》
・自分の考えを書ける子
・自分の考えを説明できる子
・話したり聞いたりできる子

《研究の仮説》
○ペア・ユニット学習、自分の考えを表現する活動を工夫・改善することで研究主題に迫れるだろう。
○家庭・地域と連携し、家庭学習や読書活動を工夫・改善すれば、研究主題に迫れるだろう。

《低ブロック（１～３年）の目指す児童像》
・わかったことを書ける子　・自分の言葉で説明できる子　・しっかり話を聞ける子
《高ブロック（４～６年）の目指す児童像》
・要点をまとめて書ける子　・相手にわかりやすく自分の言葉で伝えられる子
・互いの立場を意識し、話し合える子

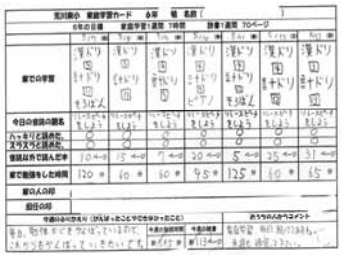
４　具体的な取組

（１）授業の中でペア・ユニット学習の効果的な取組

授業の中で効果的な小集団（ペア・ユニット）学習によって考えを深めたり、全体の前での発表したりするなど、学習展開の工夫をした。自分の考えを記録し、伝え合い、発表していく言語活動の充実により、学力向上と豊かな心の育成が図られた。

（２）家庭学習定着に向けた取組

ア　家庭学習カードの作成と活用



児童は、曜日によっては塾や習い事等があり、本校目標の家庭学習時間『学年×１０分以上』ができないことも考えられる。そこで、今年度は『家庭学習カード』を各学年の発達段階や実態に応じて作成し、全学年で活用を図った。読書時間と勉強時間を記入する欄を設けたり、家庭からのコメント欄を設けたりして、週の頑張りを記録できるようにカードを工夫した他、週ごとに家庭学習時間を集計することで家庭学習時間を貯金できるようにした。

イ　家庭学習シラバスの作成と活用

今年度の荒川東小の取組計画を家庭学習シラバスに入れ込んで作成し、各家庭に学習案内をした。また、各学年の段階で、学習していく内容も案内し、大まかな家庭学習内容の手引きとした。

ウ　家庭学習時間の設定

今年度から『学年×１０分以上』の家庭学習時間を踏まえた上で、家庭学習時間は貯金できるものとして考え、各学年で１ヶ月の家庭学習目標時間を設定をした。

エ　学習努力の見える化計画

家庭学習使用済みノートをストックし、努力が目に見える取組をした。

（３）読書活動の充実

ア　秩父市立図書館『朝読セット』の活用

イ　読書目標ページの設定

１年１００冊	２年７０冊	３年５０冊
４年２４００ページ	５年３０００ページ	６年３６００ページ

ウ　図書カードの工夫・改善

エ　学校応援団や図書委員会、図書館の方による読み聞かせ

（４）荒川東小俳句大会や荒川東小名文暗唱の取組

各学期に１回、自分が感じたことや思いを俳句で表現したものを募集し、俳句大会を開催した。また、毎月、「論語」や「時代名」などの名文を暗唱させて知識を高めとともに、発表の機会を増やし、担任や校長先生から賞賛を受けることで学習意欲を高めた。

５　おわりに（成果と課題）

教育活動の中で小集団の学習を意識し、言語活動を１つの手段として学力向上に努めることができた。また、家庭や地域との連携を図り、豊かな心の育成にも努められた。しかしながら、各種調査から、基礎学力はついてきているものの、根拠を説明する力にまだ課題がある。様々な活動で意図的に言語活動を取り入れ、自分の考えを説明できる児童の育成を目指したい。

（担当　教諭　浅見和良）

学力の向上と豊かな心の育成
～言語活動の充実をめざして～
～複式学級の指導法の工夫改善～

秩父市立荒川西小学校

1　はじめに

本校は、荒川３校で話し合い、研究主題「学力の向上を図る学習指導の改善」～言語活動の充実めざして～また、学校課題として、～複式学級の指導法の工夫改善～に取り組んできた。

2　研究の構想

学校教育目標

◎気づき　考え　実行する子
　○進んで勉強する子
　○やさしい心の子
　○たくましい子

研　究　主　題

「学力の向上と豊かな心の育成」
～言語活動の充実をめざして～
～複式学級の指導法の工夫改善～

主　題　設　定　の　理　由

全国学力・学習状況調査の結果や本校の児童の実態から、読み書きや発表の技能を高め、基礎基本を確実に定着させ、読解力の向上の基盤づくりをすることが大切であると考えた。また、昨年度から２・３年生が複式学級となり、今後も続くことから本研究主題を設定した。

仮　　説

①読み・書きなどの基礎的、基本的な内容をくり返し学習することで基礎学力が定着するであろう。
②各教科領域を通して「読む力と書く力の育成」に努めれば、文章を理解し、読み書きができ、　自分の考えを表現できる児童が育つであろう。
③「学習の約束」「発表の仕方」「声のものさし」などの学習規律を確立することにより、落ち着いて学習に取り組むことができるであろう。
④「音読カード」「全校漢字テスト」「群読発表」「ミニ作文」「読書記録カード」「お話くれよ　ん読み聞かせ」などの「全校的活動の推進」に努めれば、読み書きや発表の技能を高め、基　礎・基本を確実に定着させ、読解力向上につながる基盤をつくることができるであろう。
⑤多くの本とふれ合えるように、「読書活動の充実」に努めれば、読書する習慣が身につき、読解力を深く支える基礎的な力が育まれるであろう。
⑥言葉に対する興味を持たせ、それを調べる環境を整えれば、言葉に対する理解が深まるであろう。
⑦自分の思いや考えを書いてまとめる場を確保すれば、考えをじっくりとまとめることができるであろう。
⑧伝えたい相手や場の設定を工夫すれば、相手意識を持ち、自分の考えを表現しやすくなるであろう。

手　立　て

ア　場面の様子がよく分かるように読みを深めさせるための手だて（省略）
イ　順序よく自分の考えをまとめるための手立て（省略）
ウ　相手を意識し表現させるための手だて（省略）
エ　全体を通しての手だて（言語活動の能力を高めるための補助として）（省略）

3　具体的な取り組み

低・高学年別に２度の研究授業を行った。低学年では複式学級の授業を行い、全員で研究協議をし授業改善に取り組んだ。

（１）複式学級の取り組み（２・３年生）
第２学年　じゅんじょや様子を考えて読む　「さけが大きくなるまで」
第３学年　まとまりやつながりに気をつける「くらしと絵文字」

ア　具体的な手立て(主なもの)
間接指導を充実させるための手だて
○学習の約束を守る。（黙って挙手し、指名されたら返事をして起立。その場に合った声のものさし）
○静かに課題に取り組もうとする意識を高める。
○１時間の学習のねらいを具体的にとらえさせる。（今日は何を学習するのか、導入の工夫）
○学習形態を工夫する。（ペア学習、グループ学習、学習リーダー）
○学習が早く終わった場合どうするか指導をしておく。（漢字カード、意味調べ、友だちの援助等）
○細かく「わたり」をして支援する。
イ　成果
○学習の約束を守ることにより授業の効率化が図られ、児童が集中して主体的に学習に取り組むことができた。
○学習形態を工夫することにより、児童のリーダー性が身につき、自分たちで学習を進めるという意識がもてた。
○その時の学習状況を評価し、称賛、激励、指示が与えられた。

（２）全校の取り組み

ア　群読発表（各学年　年間２回）
イ　音読カード（通年）
エ　読書マラソン（６月・１０月）
オ　読み聞かせ（お話くれよん・図書委員）
カ　一斉漢字テスト（各学期）
キ　ミニ作文（常時）
ク　国語コーナーの活用（掲示場所…各学年廊下）
ケ　掲示コーナーの設置（西昇降口と東階段の２ヶ所）
・人権教育、保健、道徳部がタイアップした掲示。

４　成果と課題
（１）研究の成果
○児童が家庭学習や自学についてよりよく取り組めるようになった。
○ボランティアによる読み聞かせ活動や音読発表により、国語に対する興味・関心をいっそう高めることができた。
○複式学級の授業参観や授業研究会により、指導方法の工夫が研究できた。
○少人数であることを生かし、一人一人に応じたきめ細かな指導を通して基礎・基本の確実な定着が図れた。
○上学年と下学年のかかわりを通して、学年を越えて学び合う態度を育てることができた。

（２）今後の課題
○全国学習状況調査（６年）や県学習状況調査（５年）、学力検査国語（２・３・４・５年）、３つの達成目標効果の検証などの分析により、全校の現状と課題を明確にして、これから　　の見通しと課題解決の方策を検討し実践化していく。
○全教師が複式学級の担任ができるよう、一層の指導方法等の研修を行っていく。

５　終わりに
学校課題の複式学級の指導法については、２年目の今年、校内研修の取り組みで複式学級の特性や課題が学習できた。来年度は、複式学級が２学級になり、指導法や学習過程の一層の研究が求められる。全職員の協力により、今後もさらに深まる研修にしたい。

（担当　教諭　萩原克憲）